

張伴全集

第三十五卷

露伴全集

第三十五卷

複製本

昭和三十年十月十五日印刷
昭和三十年十月二十五日發行

露伴全集第三十五卷

頒價九百圓

著作權者

幸田

田

文

編纂

蝸牛

會

會

發行者

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者

東京都青梅市根ヶ布三八五番地
山田一雄

印刷所

東京都青梅市根ヶ布三八五番地
精興社

發行所

株式會社

岩

波

書

店

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地

電話(代表)九段(33)八四八六番
振替口座東京二六二四〇番

目次

國譯忠義水滸全書 承前

一

後記

國譯忠義水滸全書

承
前

目次

第四十七回	撲天鵬雙修す生死の書、宋公明一たび祝家莊を打つ	六
第四十八回	一丈青單王矮虎を捉へ、宋公明兩たび祝家莊を打つ	三
第四十九回	解珍解寶雙んで獄を越え、孫立孫新大に牢を劫かす	三四
第五十回	吳學究雙び連環の計を掌り、宋公明三たび祝家莊を打つ	五一
第五十一回	插翅虎枷もて白秀英を打ち、美髯公誤りて小衙内を失ふ	六四
第五十二回	李逵殷天錫を打死し、柴進高唐州に失陷す	七九
第五十三回	戴宗智公孫勝を取り、李逵斧羅眞人を劈く	九四
第五十四回	入雲龍法を鬪はして高廉を破り、黑旋風穴を探りて柴進を救ふ	一二三

第五十五回	高太尉大に三路の兵を興し、呼延灼連環馬を擺布す	一二七
第五十六回	吳用・時遷をして甲を盗ましめ、湯隆・徐寧を賺して山に上らしむ	一四〇

第五十七回	徐寧鈎鐮鎗を使ふを教へ、宋江大に連環馬を破る	一五五
第五十八回	三山義に聚りて青州を打ち、衆虎心を同じうして水泊に歸す	一七〇
第五十九回	吳用金鈴吊掛を賺し、宋江西嶽華山を鬧がす	一八三
第六十回	公孫勝芒碭山に魔を降し、晁天王曾頭市に箭に中る	一九七
第六十一回	吳用・智・玉麒麟を賺し、張順・夜・金沙渡を鬧がす	二二一
第六十二回	冷箭を放つて燕青主を救ひ、法場を劫かして石秀樓より跳る	二三〇
第六十三回	宋江・兵もて北京城を打ち、關勝・議して梁山泊を取る	二五二
第六十四回	呼延灼月夜に關勝を賺し、宋公明雪天に索超を擒ふ	二六五
第六十五回	托塔天王夢中に聖を顯はし、浪裏白跳水上に冤を報ず	二七七
第六十六回	時遷・火・翠雲樓を燒き、吳用・智・大名府を取る	二八九
第六十七回	宋江馬歩三軍を賞し、關勝水火二將を降す	三〇一
第六十八回	宋公明夜曾頭市を打ち、盧俊義活けながらに史文恭を捉ふ	三二六
第六十九回	東平府誤陷す九紋龍、宋公明義識す雙鎗將	三三〇
第七十回	沒羽箭石を飛ばして英雄を打ち、宋公明糧を棄てゝ壯士を擒	三三三

第七十一回 忠義堂に石碣天文を受け、梁山泊に英雄座次を排す……………三三

第四十七回

撰天鵬雙修す生死の書、宋公明一たび祝家莊を打つ

話說す、當時楊雄那人を扶起し來り、石秀と相見せしむ。石秀便ち問道ふ、這位の長兄是誰ぞ。楊雄道ふ、這箇の兄弟、姓は杜、名は興、祖貫は中山府の人氏、他の面顔生れ得て齷齪なる爲に因りて、此を以て人都て他を呼びて鬼臉兄と做す、上年間賈賣を做して薊州に來到す、一口氣上するに因りて、同夥的の客人を打死し了し、官司を喫し、監されて薊州府裏に在り、楊雄他の拳棒を説き起して都て省得たるを見、一力維持して、他を救す、想はざりき今日此に在りて相會す。杜興便ち問道ふ、恩人何の公事の爲に這裏に來到せる。楊雄耳に付き低言し道ふ、我薊州に在りて人命を殺了し、梁山泊に投じ去つて夥に入らんと欲要、昨晚祝家店に在て投宿す、同一箇の來る火的火伴の時遷、他の店裏の報曉雞を偷了して喫するより、一時店小二と鬪將起し來り、性起り、他の店屋を把つて火を放つて都て燒了す、我三箇連夜逃走す、背後より起來るを隄防せず、我弟兄兩箇他の幾箇を捌翻了す、想はざりき亂草中間より兩把の提鉤を舒出し、時遷を把りて塔了し去る、我兩箇亂撞して此に到り、正に路を問はんと要、想はず賢弟に遇見す。杜興道ふ、恩人慌するを要せず、我時遷を放つて你に還さしめん。楊雄道ふ、賢弟少らく坐し、同一一杯を飲めと。三人坐下し、當下酒を飲む。杜興便ち道ふ、小弟薊州を離了し

てより、多く恩人的恩恵を得、這裏に來到して、此間の一箇の大官人の愛せらるゝを感承す、小弟を收録して家中に在き、箇の主管と做し、毎日萬を撥し千を論ず、盡く托して杜興身上に付與し、甚だ是信任せらる、此をもつて郷に回りに去くことを想はず。楊雄道ふ、此間の大官人は是誰ぞ。杜興道ふ、此間の獨龍岡の前面に三座の山岡有り、三箇の村坊を列着す、中間は是祝家莊、西邊は是扈家莊、東家は是李家莊、這三處の莊上三村裏、算來すれば總て一二萬の軍馬人家有り、唯祝家莊有り最も豪傑、頭たる家長は祝朝奉と喚做す、三箇の兒子有り、名づけて祝氏三傑と爲す、長子は祝龍、次子は祝虎、三子は祝彪、又一箇の教師有り、鐵棒欒廷玉と喚做す、此人萬夫不當の勇有り、莊上自ら一二千の了得せる的の莊客有り、西邊の那箇の扈家莊、莊主扈太公、箇の兒子有り、飛天虎扈成と喚做す、也十分に了得す、唯一箇の女兒有り最も英雄にして、名を一丈青扈三娘と喚ぶ、兩口の日月雙刀を使ふ、馬上如法に了得す、這裏東村莊上、却て是杜興的の主人、姓は李、名は應、能く一條の渾鐵點鋼鎗を使ひ、背に飛刀五口を藏し、百歩の人を取り、神出鬼没なり、這三村生死の誓願を結下し、同心共意し、但吉凶有れば遽に相救應す、惟梁山泊の好漢の過來して糧を借らんことを恐れ、此に因り三村他に抵敵するを準備し下す、如今小弟二位を引いて莊上に到り、李大官人に見えしせしめ、書を求めて去いて時選を搭救せん。楊雄又問道ふ、徐の那の李大官人は、是江湖上に撲天鵬李應有りて是好漢なりと説ふを、却て原來這裏正に是他なり。石秀道ふ、江湖上只聽得たり獨龍岡に箇の撲天鵬李應有りて是好漢なりと説ふを、却て原來這裏に在りしか、多く聞く他眞箇に了得せる是好男子なりと、我們去つて走一遭せん。楊雄便ち酒保を喚び、酒錢を

- (一)前かた。(二)腹立。(三)なかま。(四)支配人。(五)多額の支出收入。(六)武藝の出来る。(七)すべて鐵にして先の鋼のつきたる鎗。(八)飛刀は手裏劍の如きもの。(九)生死を共にせんとの誓。

計算す。杜興那裏に肯て他の還すを要せん、便ち自ら酒錢を招了し、三箇村店を離了し、便ち楊雄石秀を引きて李家莊上に来到す。楊雄看る時、眞箇に好大莊院、外面一遭の潤港を週廻し、粉墻岸に傍ふ、數百株の合抱不交的大柳樹有り、門外一座の吊橋、莊門に接着す、門に入得來り、廳前に到る。兩邊に二十餘座の鎗架有り、明晃晃的都て軍器を插し滿たせたり。杜興道ふ、兩位の哥、此に在りて少らく等ち、小弟の入去つて報知するを待て、大官人を請ひて出來りて相見せしめん。杜興入去る多時ならず、只見る李應裏面より出來る。楊雄石秀看る時、果然好(一)表の人物、臨江仙の詞有り、證と爲す。

鵝眼鵬頭は虎に似たり、燕領猿臂狼腰、財を疎んじ義に仗り英豪に結ぶ。愛して騎る雪白の馬、喜びて看る絳紅の袍。背上の飛刀五把を藏し、點鋼の鎗は斜に銀條を嵌す。性剛誰か敢て分毫を犯さん、李應眞に壯士、名は號ふ撲天鵬と。

當時李應出で廳前に到る。杜興・楊雄石秀を引いて廳に上り拜見せしむ。李應連忙答禮し、便ち廳に上り請坐せしむ。楊雄石秀再三謙讓し、方纔坐了す。李應便ち酒を取り來らしめて且相待つ。楊雄石秀兩箇再拜し道ふ、望むらくは大官人の書を致して祝家莊に與へ來らしめ、時遷の性命を救はんことを乞ふ、生死敢て忘るゝ有らじ。李應門館先生を請ひ來りて商議せしめ、一封の書紙を修了し、名諱を填寫し、箇の圖書印記を使い、便ち一箇の副主管を差して齎了し、一匹の快馬を備へ、星火のごとく祝家莊に去きて這箇の人を取り來らしむ。那副主管東人の書札を領了し、馬に上り去了す。楊雄石秀拜謝し罷る。李應道ふ、且請ふ後堂に去きて少か三杯を敘して等待ん。兩箇裏面に隨進す、就ち早膳を具して相待つ。飯罷り、茶を喫了す。李應些の鎗法を問ふ。楊雄石秀の説理的理有るを見、心中甚だ喜ぶ。巳牌の時分、那箇副主管回り來る。李應喚んで後堂に到らしめ問道

ふ、去いて取るこの這人は那裏に在る。主管答へ道ふ、小人親しく朝奉に見え、書を下了す、倒つて放還の心有り、後來祝氏三傑を走出す、反つて焦躁し起し來り、書もまた回さず、人もまた放さず、定めて州に解上し去らんと要す。李應失驚して道ふ、他と我と三家村裏生死の交を結ぶ、書到らば便ち當に依允すべし、如何ぞ怎地起し來る、必ず是你の説得て好からず、以て此の如きを致せるならん、杜主管、你自ら去いて走一遭し、親しく祝朝奉に見え、箇の仔細緣由を説くべし。杜興道ふ、小人願はくは去かん、只東人の親筆の書紙を求めて那裏に到らば、方纔に肯て放さん。李應道ふ、説得て是なりと、急に一幅の花箋紙を取り來る。李應親自書札を寫し、封皮面上一箇の諱字圖書を使し、杜興に把與す。接了して後槽より一匹の快馬を牽過し、鞍轡を備上し、鞭子を拏了し、便ち莊門を出で、馬に上り鞭を加へ、祝家莊に達り去了す。李應道ふ、二位放心せよ、我が這封の親筆書し去る、少刻當に放還さるべし。楊雄石秀深謝し了し、留めて後堂に在き、飲酒して等待す。看々天色晚れんと待す。杜興の回來るを見ず、李應心中疑惑し、再び人をして去いて接せしむ。只見る莊客報道す、杜主管回り來り了す。李應問道ふ、幾箇人回來するぞ。莊客道ふ、只是主管獨自一箇、馬を跑けさせて回來す。李應頭を揺着して道ふ、却て又作怪なり、往常這厮は這等に兜搭せず、今日何に縁りて恁地なる。楊雄石秀都て前廳に跟出來りて看る時、只見る杜興馬を下了し、莊門に入得たり。他の模様を見るに、氣し得て、面皮を紫漲し了し、牙を咨して嘴に露はし、半晌話を説きの詩有り證と爲す。

- (一〇) 還是支拂ふこと。 (一一) ひろきほり。 (一二) しらかべ。 (一三) かゝへ餘る。 (一四) つりばし。 (一五) 家庭教師。 (一六) 東人は主人。 (一七) 朝飯。 (一八) おこり出し。 (一九) 州廳にさし出す。 (二〇) 承知すべし。 (二一) 口上不調法にして。 (二二) 諱字は名前。 (二三) うまや。 (二四) をかしい。 (二五) ぐづつかず。 (二六) はらちて。 (二七) かほを赤くし、牙をかみ出し。

面貌天生本異常、怒る時古怪更に當り難し。三分は像ず人の模様に、一に似たり酆都の焦面王に。

李應出で、前廳に到り、連忙問道ふ、你且備細の緣故を説け、怎麼地來る。杜興氣定了し、方纔道ふ、小人東人の書札を齎了し、他の那裏に到る、第三重の門下に却て好く祝龍、祝虎、祝彪弟兄三箇の坐して那裏に在るに遇見す、小人三箇の咄を聲了す、祝彪喝道す、你又來りて甚麼を做す、小人身を躬めて稟し道ふ、東人書有りて此に在り拜上すと、祝彪那厮臉を變了して罵り道ふ、你那主人恁如に人事を曉らざるや、早晌に箇の潑男女を使得這裏に來りて書を下さしめ、那箇の梁山泊の賊人時遷を討むるを要す、如今我正に州裏に解上し去るを要す、又來りて怎地するぞ、小人說道ふ、這箇の時遷は是梁山泊夥内の人數ならず、他は自らは薊州より來る客的客なり、今敝莊の東人に投見す、想はざりき誤りて官人の店屋を燒了す、明日東人自ら當に舊に依り蓋ひ還すべし、萬望す薄面を俯看し、高く貴手を擡げ、寬恕寬恕と、祝家の三箇都て叫び道ふ、還さず還さずと、小人又道ふ、官人請ふ東人の親筆書札の此に在るを看よ、祝彪那厮書を接過し去り、也拆開し來りて看ず、就ち手扯し粉砕し、喝叫し小人を把つて直ちに莊門を又出す、祝彪祝虎發話し道ふ、老爺們的性發するを惹くを要する休れ、你的那の李應を捉つて把へ來り、也梁山泊の強寇と做して解了し去らん、小人本敢て言を盡さず、實に那の三箇の畜生に無禮され、東人を把つて百般穢罵し、便ち莊客を喝叫し來つて小人を拿らんとし、小人に馬を飛ばして走了せらる、路上に於て小人を氣死す、耐へ耐し那厮、枉げて他と許多年生死の交を結び、今日全く些の仁義無し。詩に曰く、

徒らに聞く漆に似ると膠の如しとを、利害場中便ち抛つに忍ぶ。平日若眞の義氣無くんば、時に臨んで説く休れ死生の交。

李應聽罷り、心頭那の(一)把の無明の業火高く擧がる三千丈、按納し下さず、大に莊客を呼び、快く我が那の馬を備へ來れ。楊雄石秀諫め道ふ、大官人怒を息めよ、小人們の爲に貴處の義氣を壞すする休れ。李應那裏に肯て聽かん、便ち房中に去いて一副の黄金の鎖子甲、前後獸面の掩心なるを披上し、一領の大紅袍を穿ち、背勝邊に飛刀五把を插着し、點鋼鎗を拿了し、鳳翅盔を戴上し、出で、莊前に到り、三百の悍勇の莊客を點起す。杜興また一副甲を披、(二)把の鎗を持つて馬に上り、二十餘騎の馬軍を帶領す。楊雄石秀もまた抓扎し起し、朴刀を挺着し、李應的の馬に跟着し、逕に祝家莊に遡り來る。日漸く山に銜まるゝ時分、早く獨龍岡の前に到り、便ち人馬を將て排開す。原來祝家莊又蓋し得て好く、這(一)座の獨龍山岡を占着し、四下一遭の潤港、那莊は正に造つて岡上に在り、三層の城牆有り、都て是頑石壘砌する、約そ高さ二丈、前後兩座の莊門、兩條の吊橋、牆裏四邊、都て窩舖を蓋す、四下裏遍く鎗刀軍器を插着し、門樓上戰鼓銅鑼を排着す。李應馬を勒して莊前に在り、大に叫ぶ、祝家の三子、怎で敢て老爺を毀謗するぞと。只見る莊門開く處、五六十騎の馬を擁出し、

(一八)冥土の俗説十王中の一。(一九)ばかもの、男女の文字にかゝはるなかれ、前の使者をいふ也。(二〇)修復し御かへし申さん。(二一)手前の面にめんじて御ゆるし下されと甚だ叮嚀にいひたる也。(二二)つき出す也。(二三)はらだち。(二四)おさへきれず。(二五)鎖子甲は絲絨しならずして鎖りおどしなるをいふ。掩心は胸と背の重要部分を掩へる也。獸面は獅子など猛獸の面。披上はひつかけ着る也、背中に也。(二六)鳥の翅の兩方に出たる兜也。鳳翅は威を添ふる飾也。(二七)衣服などびらつかぬやう結束する也。(二八)蓋は建築すること也。(二九)ひろき堀。(三〇)石を疊める。

来る、當先一騎火炭の似く赤きの馬上に祝朝奉の第三子祝生を坐落す。忘生の裝束ぞ、

頭に縷金の荷葉盔を戴き、身に鎖子梅花甲を穿ち、腰に錦袋の弓と箭とを懸け、手に純鋼の刀と鎗とを執

る、馬額下に地を照すの紅纓を垂れ、人面上に天を撞くの殺氣を生ず。

李應祝彪を見たり、指著して大に罵りて道ふ、你這厮、口邊の妳腥未だ退かず、頭上の胎髮猶存す、你的爺

と我と生死の交を結び、誓願して同心共意し、風坊を保護す、你的家但事出有て人を取るを要する時、早く來

れば早く放す、物件を取るを要すれば、奉ぜざる有る無し、我今一箇の平八を二次書を修めて來り討む、你如何

ぞ我的の書札を扯了し、我名を恥辱す、是何の道理ぞ。祝彪道ふ、俺家你と生死の交を結びと雖も、誓願して同

心協意し、共に梁山泊の反賊を捉へ、山寨を掃清せんとす、你如何ぞ却て反賊に結連する、意謀叛に在らん。李

應喝し道ふ、你他は是梁山泊の甚人と説ふや、你這厮却て平人を冤して賊と做す、當に何の罪を得べき。祝彪

道ふ、賊人時遷已に自ら招つす、你這裏に在りて胡說亂道するを要する休れ、遮掩し過ぎざらん、你去らば便ち

去れ、去らざる時你を連ねて捉了し、また賊人と做して解送せん。李應大に怒り、坐下の馬を拍ち、手中の鎗を

挺して、便ち祝彪に達る。祝彪馬を縱つて去つて李應と戦ふ。兩箇獨龍岡前に就て一來一往一上一下し、十七

八合を鬪了す。祝彪李應と戦ひ過す、馬を撥回して便ち走る、李應馬を縱ちて趕將し去る。祝彪鎗を把つて横

擔して馬上に在き、左右弓を拵り、右手箭を取り、箭を搭上し、弓を拽滿し、較親きを覗ひ得て、身を背翻して

一箭す。李應急に躲る時、臂上に早く着す。李應翻筋斗して馬より墜下し來る。祝彪便ち馬を勒轉し來つて搶

入す。楊雄石秀見了り、大喝一聲し、兩條の朴刀を撚り、直に祝彪の馬前に達り殺將し來る。祝彪抵當り住す、

急に馬を勒回して便ち走る、早く楊雄に一朴刀馬の後股上に戮在せらる。那馬疼を負ひて壁直に立起し來る。

險些兒祝彪把つて揪して馬下に在かんとす、却て馬上に隨從する的人に都て箭を搭上し射將し來らる。楊雄石秀見了り、自ら思ふ又衣甲の身を遮る無しと、只得退回して趕はず。杜興また自ら李應把つて救起し馬に上せ、二三里の路を趕了し、天色の晩來るを見て、也自ら回りに去ります。杜興李應を扶着して莊前に回到し、馬を下り了し、同に後堂に入りて坐す。衆宅眷都て出來りて看視し、箭矢を拔了し、伏侍し衣甲を卸了し、便ち金瘡藥を把つて瘡口に敷了し、連夜後堂に在りて商議す。楊雄石秀・杜興と說道ふ、既に是大官人那斯に無禮され、又箭に申了りし、時遷亦出來する能勾ず、都て是我等大官人を連累了す、我弟兄兩箇、只得たり梁山泊に上り去り、懇に晁宋二公并に衆頭領に告げ來り、大官人の興に讐を報じ、就ち時遷を救はんと、因て李應に辭謝了す。李應道ふ、是我が心を用ひざるに非ず、實に奈ともする無きに出づ、兩位の壯士、只怪む休きを得よ。杜興を叫び、些の金銀を取りて相贈る。楊雄石秀那裏に背て受けん。李應道ふ、江湖の上、二位必ずしも推却せざれ。兩箇方纔に收受して拜辭了す。李應杜興村口に送出し、大路を指與す。杜興別を作了し、自ら李家莊に回る。話下に在らず。且説く、楊雄石秀路を取り梁山泊に投じ來る。早く望見す一處の新造的酒店、那酒旗兒直挑出きたるを。兩箇店裏に入到し、些の酒を買ひて喫し、就ち路程を問ふ。這酒店は却て是梁山泊の newly 添設して眼と做す的酒店、正に石勇掌管す。兩箇一面は酒を喫し、一頭は酒保に梁山泊に上るの路程を動問す。石勇他の兩箇の常に非るを見、又來りて答應し道ふ、你兩位の客人那裏より來り、山に上り去るを問ふを要して怎地する。楊雄道ふ、我々は蘄州より來る。石勇猛可に想起し道ふ、足下は是石秀に非る莫き麼。楊雄道ふ、我は乃

(四一) 梅花甲、前に出づ。
(四二) ひぢにはや當る。

(四三) 乳くさいのがまたとれず。

(四四) 風坊疑ふべし、金本村坊に作る、從ふべし。